悔い改め

「悔い改め」は、英語圏で特に誤解されやすい言葉です。

次に救いに至る悔い改めではないものを上げて見ましょう。

1. それは、罪を遺憾に思うことではありません。
2. それは、罪をざんげし、人生を正すことではありません。
3. それは、人生を神に明け渡して神が人生の先導者になるということではありません。

救いに至る悔い改めとは、自分の罪を遺憾に思ったり、罪をざんげしたりすることとは一切関係ありません。実に神は私たちを有りのままの姿でお救いになりたいのです。聖書は次のように教えています。

> 「しかし、私たちがまだ罪人であった時、キリストが私たちのために死んで下さった。」 (ローマ人5章8節)

救いに至る悔い改めとは次のように定義します。

救いに至る悔い改めとは、宗教とか、儀式とか、律法に忠実であることによって永遠の命を獲得しようとする思いを改めることです。

「悔い改め」という言葉をギリシャ語に照らし合わせて見ると、それは、「思いを変える」という意味です。だれでも良い行ないによって永遠の命を獲得できると思う者は、自分のこの思いを変える、つまり悔い改める必要があると、み言葉は教えています。人は自分の行ないに頼るのではなく、神を信じることによってのみ救われるという、この恵みの原理に立ち返るべきです。

マタイ伝3章7ー9節に、宗教指導者たちは本当に自分たちは天国に行けると信じていました。それは自分たちこそユダヤ人の父であるアブラハムの子孫であったからです。神はユダヤ人を選民とし、そこに宗教を設定しました。宗教指導者たちは、正に自分たちこそ正当な宗教のただ中にいるので、必ず天国に行けると信じていました。しかしバプテストのヨハネが現われて、この人たちこそ悔い改めなければならないと断言しました。それは、自分の宗教を行なうことによって天国に行けるという思いを根本的に変えなければならないということを意味します。

ルカ伝13章1ー5節に、エルサレムにあるシロアムの塔が事故で倒れて、18人の人が死んだという話があります。ユダヤ人はとかく因果関係で判断します。宗教偽善者こそ、だれよりも罪深い人だと思っていた者もいました。しかし神だけが人の心の本当の思いを知っておられるのです。たまたまこれらの18人は町で一番罪深い人だったので不慮の事故死にあったのだろうと判断してしまいました。人々はさらに理屈を重ね、この事故に会わなかった人々こそ神のさばきを受けない善良な者だと思いました。はたして人は、ある程度の良い行いを続けることにより、神のさばきを受けないですむのでしょうか。このような人は、永遠のさばきの対象になると、イエスは警告なされました。さらにこのような者こそ悔い改めなければならないと言われました。人は自分の努力に頼ることによってではなくただイエスを信じる信仰によってのみ救われるのです。

ヘブル人9章9ー14節には、規定とか儀式に従うことによって人は神に近付こうとしますが、それは本質とはほど遠い、「死んだ行ない」にすぎません。ヘブル人の前半の6章1節では、信仰の基本は、「死んだ行ないの悔い改めと、神に対する信仰」だと教えています。つまり人は神を真剣に信じる前に、「死んだ行ない」(儀式、規定など)に頼るのをやめるべきです。

聖書は、はっきり示しています。もし人は自分の信じる宗教によって天国に行けると思うなら悔い改めなければなりません(マタイ伝3:7ー9)。あるいはもし神の律法に忠実であることによって天国に行けると思うなら、悔い改めなければなりません(ルカ伝13:1ー5)。あるいはもし儀式や規定に従うことによって救われると思うなら、悔い改めて、そのような考えを捨てなければなりません(ヘブル人6:1)。この小冊子の14ページの所で、述べたように、贈り物に対して支払いをしようとした人は、その差し出したお金をひっこめて、素直に永遠の命を贈り物としていただく必要があります。

たとえ罪の身代わりに死んで下さったイエスを信じても、一方では洗礼をしなければ救われないとか、教会に通わなければ救われないとか、十戒に従わなければ救われないとか言うのであれば、その信仰は本質を失っているかもしれません。人は信仰に何かを付け加えることによって天国に行けるのではありません。人はあくまでキリストを信じる信仰以外のなにものによっても救われない事を肝に銘じる必要があります。